関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

T. H. ハックスレィの「進化と倫理」をめぐって：その二

著者	堀 正人
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	8
ページ	1-15
発行年	1975-12-31
その他のタイトル	T. H. Huxley's Evolution and Ethics : Its Sound and Echo (?)
URL	http://hdl.handle.net/10112/16091

T・H・ハックスレイの「進化と倫理」をめぐって——その二——

堀　正　人

侯官（福建省）の人、厳復（Yen Fu, 1853—1921）がT・H・ハックスレイの『進化と倫理』（*Evolution and Ethics*）を訳したのは一八九六年（清の光緒二十二年）の夏であったという。その序に「夏日年ノ如シ。聊ヵ迻訳ヲナス。……光緒丙申重九」という自記がある。だがこの中国における西書の古典的訳業がなされた正確な時期については議論の余地があり、一八九五年、あるいは一八九四年すでに訳了されたとさえ言われているそうである。[1] しかし、T・H・ハックスレイが『進化と倫理』に「序論」（Prolegomena）を書き加え、その他の彼の試論と合せて一巻として、広くこれを世に問うたのは一八九四年であり、その「序」（Preface）の最後に「一八九四年七月」の日附がある。[2] また一方において、一八九四年には清国は日本と開戦して陸海軍ともに敗北しており、厳復は一八八〇年李鴻章が北洋海軍を経営したとき天津水師学堂の総教習に任ぜられて以来、当時なおその首脳の地位にいたのであるから、[3] いかに悠々たる大国とはいえ、それらの事情を総合して見ると、一八九四年中に『進化と倫理』が訳了されたとするのは可能性の乏しいことになるのではあるまいか。がその訳了の時点の問題はしばらく措いて、厳復は一八九七年その稿を桐城の呉汝綸に送って序を乞い、[4] 一八九八年に至ってそれは刊行された。[5] 題して『天演論』という。天演が進化の意味であることは言うまでもない。[6]

厳復がこの訳業を完成するために払った苦心の並々でなかったことは、この書の「訳例言」を見ただけでも十分想像することができる。そこにはまず彼がその作業において終始堅持した彼の明確な目的と方法とが顕示されている。それは「信・達・雅」という、いわば彼の翻訳の三原則である。「信」とは原文・原著の意味を誤なく伝えることである。だがその真意が伝達力を持たなかったら、一応逐語的には正確な翻訳といえども訳としては無意味である。「顧ウニ信ニシテ達セザレバ訳ストイエドモ猶オ訳セザルガゴトシ」と彼はいう。「達」が「訳事」の目的でなければならない。従って新奇な思想・知識の伝達のためには、それに応ずる附加的説明の方法を取らなければならない。すなわち彼が「詞句ノ間、時ニ偻到付益ス

ルトコロアリ、字比句次ニ斤々タラズシテ意義ハ則チ本文ニ倍カズ」というゆえんである。

だがそれにしても新しい思想・知識の伝達のために、翻訳者は常に既存の言葉にのみ依存していることはできない。『天演論』において厳復が幾多の新語を案出しなければならなかったのは当然または必然であった。「物競・天択・儲能・効実ノ諸名ノゴトキ、皆我ヨリ始マル。一名ノ立ツニ旬月踟蹰セリ」と彼自身、その業績と苦心とについて語っている。これはまた、彼の訳業がその才学をもってしても、さほど簡単に、急速に成しとげられなかったことの証拠となり得るのではなかろうか。だがそれはそれとして、彼の新造語なるものを見て、――「物競」は生存競争（struggle for existence）であり、「天択」は自然選択・自然淘汰（natural selection）であり、[7]「儲能」は可能性・潜勢力（potentiality）であり、「効実」はその顕現・展開（epiphany, explication）であるが、[8]それら全体に感じられるのは彼の文人趣味・古典趣味である。そしてこの文人趣味・古典趣味が彼の造語法の基本原理であったばかりでなく、彼の翻訳全体の原則の一つであった。「雅」というのがそれである。

いったい中国人にとって、古来、文章は重大な問題であったらしいが、[9]厳復の時代においても、当時の読書人にとって「文章的価値が内容に先行する」[10]ほどの意味をもっていたそうである。それは彼等にとって外国の書物であるT・H・ハックスレイの「進化と倫理」に対する呉汝論の評価が、その内容と文章的価値との総和において

二

なされているらしいのを見てもわかるが、[11]呉の文学的流派に属し、その推重を受けた厳復が、[12]これと同様の考え方を持っていたことはいうまでもない。しかも彼等にとって、――この場合、厳復にとって、その文章的価値の基準は古典的（雅）ということであった。だが、さてこの「雅」の基準は、さきの「達」のそれとどのような関係に立つか。

この点についても厳復は最初からきわめてはっきりした見解と態度とを持っていた。彼は古典的（雅）な文章が日常的・事務的・娯楽的な現代文よりはるかに恒久的な生命をもち、従って未来のしかるべき読者の理解に達し得るものと信じていた。呉汝論がその序に「凡ソ書ヲ為ルハ必ズソノ時ノ学者ト相入リテシカル後ニソノ効、明カナリ。今、学者方ニ時文・公牘・説部ヲモッテ学ヲ為ス。シカルニ厳子ハコレニ進ムルニ、久シウス可キノ詞、晩周諸子ト相上下スルノ書ヲ以テセントス。吾ハソノ侔馳シテ相入ラザルヲオソル。然リト雖モ厳子ノ意ハ蓋シ待ツアラントスルナリ」と書いているのはそれである。だが厳復は古典的文章を、単なる古典趣味や、長き過去に堪え得たものは長き未来にも堪え得るだろうという歴史的類推からのみ尊重したのではない。彼は古典的文章が、少くとも彼の時代の現代文よりはるかに精緻な理論や微妙な思想の表現に適していると信じたからである。彼は「訳例言」の中に「……実ハ則チ精理微言、漢以前ノ字法句法ヲモッテスレバ則チ達ヲナシ易ク、近世ノ利俗文字ヲ用ユレバ則チ達ヲ求メ難ク、往々義ヲ抑エ詞ニ就キ、

毫釐（ノ差）千里（トナル）。審ニ斯ノ二者ノ間ヲ択ブハ、ソレマコトニ已ムヲ得ザルトコロアルナリ。豈ニ奇ヲ釣ランヤ」といっている。すなわち彼の「雅」の原則がその美的欲求から来ているだけではなく、むしろ意味の伝達上、不可欠なものだというのである。かくして「信・達・雅」の翻訳の三原則は、鼎立してその訳文を支えているというよりは、少くとも本質的には、彼において三位一体的な意味をもっていたということができると思う。

もっとも、何故に古典的文章が精緻な理論や微妙な思想の伝達に適しているのかについては、彼は説明を与えていない。おもうに中国言語の最も根本的な性格に基く言語・文章の構成の実用的及び美的工夫は漢以前にすでに完成したので、その骨骼が失われ、あるいは曖昧になった後世の文章より、少くとも新しい表現方法の案出・流通を見るまでは、古典的文体の方がよりよき思想伝達の道具であると彼は信じたのであろう。だがそれは彼に尚古典趣味がなかったということを意味しない。「雅」はそれ自身、彼の翻訳の三原則の中の重要な一支脚であった。もっとも彼は西洋の思想・文化に目を向け、発展性のない中国の政治・社会・文化の全体に拡がる沈滞ぶりを痛烈に批判し、叱咤し、[13]「尊民叛君、尊今叛古」を説いて、いわゆる「激進派」の中に教えられるべき人物であった。[14]だが同時に、彼は当時の中国の知識階級の一人としてその古典に精通していた。『天演論』の冒頭の文を読むと、少しばかりでも中国古典の素養のあるものなら、誰しも『荘子』「斉物論」のはじめの部分を連想するだろう。[15]またその訳文の中には、たとえば「誰則尸之」[16]とか、「空乏共身、払乱所為」[17]とか、「則黎民於変而時雍」[18]というような古典からの引用が彼自身の言葉として使用されている。それらは当時の中国のインテリ層の人々が容易にうなづきあい、楽しんで領解し、あるいは敬意を抱きつつ愛読することのできたものであったであろう。が、とにかくこのような古典的文章に拠りかかってなされた訳業は、その文章の美的完成に重点を置けば、それが文章の構成と密接的に関連する書物全体の構成にも影響することは当然ではあるまいか。事実、彼は原書の構成そのものに幾分自由な変更を施した。幸いハックスレイの原著の「進化と倫理」の本文の部分も、講演とはいえ、立派な構成をもった文章であり、ことに印刷されたその文章には幾つかの大きな段落が設けられている。またその「序論」は最初から十五篇に分れている。そしてその一段・一篇の長さもおのおの、幾分の不同はあるが、いわば内面的な有機的緊張が持続し、完結して一篇を構成する、中国の古典的文章をもって対応・処理できるほどのものである。厳復はそれらを適当に裁断し、時には縫い合せた。そして諸子の書の体裁を学んで各篇に題名をつけた。また原著には最後にそれぞれ大抵みな、かなり長文の註、二十四が付いているがそれは省略した。いづれも、西洋の学問・思想に疎い当時の中国人には難解で、その訳出は徒労に過ぎないと信じたからであろう。それよりも彼は彼自身の註解と意見とを書き加える方法を採った。『天演論』の諸篇の殆んど全部の末尾についている「案語」

なるものがそれである。だがいまその「案語」は問題の外に措いて、『天演論』の各篇を、その書の構成と各篇の内容とを簡単に窺うために、ハックスレイの原著と対照して見ると、（この翻訳の性質上厳密なことはいえないが）大体次の通りである。

『天演論』上巻・導言　*Evolution and Ethics*, I, Prolegomena.[19]

察変第一	Ⅰ（p.5 の前半まで）
広義第二	Ⅰ（p.5 の後半より）
趨異第三	Ⅰ（p.7 を敷衍）
人為第四	Ⅱ
互争第五	Ⅲ
人択第六	Ⅳ
善敗第七	Ⅴ
烏託邦第八	Ⅵ
汰蕃第九	Ⅶ
択難第十	Ⅷ
蜂群第十一	Ⅸ
人群第十二	Ⅹ（p.27 まで）
制私第十三	Ⅹ（p.27 以下）
恕敗第十四	Ⅺ
最旨第十五	Ⅻ
進微第十六	XIII（十六の前半は特に原著から離れている）
善群第十七	XIV
新反第十八	XV（十八の始めの部分も原著から離れている）

さらに『天演論』下巻・論は *Evolution and Ethics* において特に Evolution and Ethics〔The Romanes Lectures, 1893〕と題されている部分で、原文は幾つかの段落に分けられ、その間に空白の行を置いているが、頁の替り目の箇所があるために正確にその段落を定めることができない。従って頁数を付記して『天演論』との関係を示すことにすれば、——

下巻・論　*Evolution and Ethics*, II. Evolution and Ethics.

能実第一	Ⅰ（ほぼ原著の第一段と見るべきところにあたる。但原著における「ジャックと豆の木」の譚は省かれ、p.50に終る。）
憂患第二	Ⅱ（pp. 50—53）
教原第三	Ⅲ Ⅳ（pp. 53—55）
厳意第四	Ⅴ（pp. 56—58）
天刑第五	Ⅵ（pp. 58—59）
仏釈第六	Ⅶ（pp. 60—61）
種業第七	Ⅶ（pp. 61—63）
冥往第八	Ⅻ（pp. 63—65）
真妄第九	Ⅶ（pp. 65—66）

仏法第十　Ⅶ（pp. 66—69）
学派第十一　Ⅷ（pp. 69—71）
天難第十二　Ⅷ（pp. 71—73）
論性第十三　Ⅷ（pp. 73—75）
矯性第十四　Ⅸ Ⅹ（pp. 75—77）
演悪第十五　Ⅺ（pp. 77—80）
群治第十六　Ⅺ（pp. 80—82）
進化第十七　Ⅺ（pp. 82—86）

およそ、これだけはっきりした方針をもち、実際上の苦心が払われたという事実からだけでも、この書の訳業としての意味と価値とは高く認められなければならない。だが、主として当時の中国の社会的・文化的環境のために、その翻訳上の方針が「達」と「雅」とにより傾いて、何といっても「信」が閑却されがちになったことは、厳復自身がすでに心得ていたのである。だから彼は「訳天演論」「訳例言」なぞいう言葉を使いながら、その書の巻頭に「英国赫胥黎（ハックスレイ）造論　侯官厳復達恉」と書き、また「訳例言」においても、「自ラ題シテ達恉トイイ、筆訳トイワズ。発揮ニ便ナルヲ取ル」といったのである。[補註13] だがとに角これほどの（自覚をも含む）用意をもってなされた翻訳は、呉汝論がさきに中国的な、はるかな地平を見やる眼ざしをして、「ソノ倜馳シテ（時代ト）相入ラザルヲオソル。シカリト雖モ厳子ノ意ハ蓋シ待ツアラントスルナリ」といったにも拘らず、遠い未来を待つまでもなく、その書が刊行されるやいなや、明日の中国に深い関心を持つ知識人の間に忽ち大きな反響を呼び起した。その間の事情については、増田渉氏の「中国文学史研究」の中にきわめて精彩に富んだ記述があるが、[20] 特に当時若き魯迅(1881—1936)が『天演論』の文章に感服し、またそれが与えるヴィジョンや知的展望の新しさ、高さ、広さに胸を躍らせたことがわかるのは甚だ興味深い。同時に『天演論』が、当年の中国の暗澹たる国際政治上の危機的情勢を背景にして、「優勝劣敗、適者生存」を教える政治的警告そのものとして、知識的青年層に働きかけた事実を、胡適（1891—1962）の言葉から知ることのできるのは、われわれに非常に有益である。更にそこには厳復の紹介した進化論が「ただ一般的な流行というだけではなく、「当時の改革運動にも重要な理論的根拠をあたえ、」そして康有為（1858—1927）の変法論の根拠にさえなったことが語られている。厳復はかくしてついに、毛沢東によって洪秀全、康有為、孫中山とともに新しい中国の先駆者の一人に教えられるに至るのである。

T・H・ハックスレイがその『進化と倫理』によって自由主義陣営の逃亡兵あつかいを受けたことは前にわたくしが述べた通りであるが、[21] 彼はその中でこういっている。「倫理的に最上なるもの、すなわち所謂善あるいは徳の、実践とは、あらゆる点において、自然界の生存競争場裡に勝を制するにいたるべき行為に反対なる行為を意味す。そは仮借なき自己主張に代うるに、自己抑制を要求す。また

あらゆる競争者を排除し、あるいは蹂躙するに代うるに、各個人がその同胞をただに尊敬するに止らず、援助すべきことを要求す。しかしてその力を、最適者の生存よりも能う限りの多数者を生存するに適せしむるに傾注す」[23]と。かかる主張をもった書物の翻訳が、いったいどうして「自然界の生存競争」さらに「国際的生存競争」の意識を刺撃する政治的教課書、あるいはいうなれば檄にさえなったのであろうか。思うに、その一つの理由は、生存競争・自然選択という手近なそれでいて紛糾した事実が、「生存競争」・「自然選択」（物競・天択）という簡潔な観念・言語にまとめられ、（しかも突如として示され）それが中国人に標語的な衝撃力を持ったということである。しかもその標語には科学の裏付けがあった。さらに考えられるも一つの理由は、――生存競争を国際政治の場において見れば、西洋は優者であり、当時中国は劣者の地位にあった。優者にとって競争の停止の教義を提唱することはむしろ容易であっても、劣者は却って競争の事実に絶対に無関心ではありえないということである。胡適は「この書物（『天演論』）を読んだ者は、殆どハックスレイの科学史、あるいは思想史における功績について理解したのではなかった」と書いている。[24]恐らくこれは真実であろう。だが、もし当時の中国に少数の冷静なその理解者がいたとしても、彼等もまた国際政治の問題から切り離して、この書を読むことはできなかったに違いない。まず何よりも中国人は由来すべてを政治との関連において考える国民だと想像されるからである。[25]

だがそれは『天演論』の読者に関する問題である。著者厳復と『天演論』そのものについてはどうであろう。いうまでもなく厳復は当時の一般的中国人の水準をはるかに抜いた進歩的知識人であった。彼が単純な国粋主義者なぞでなかったことは已に明らかなことである。が同時に彼が一般中国人と同様の性情を分有しそれを理解し、その伝統的文化を十分身につけていたことを忘れてはならない。（彼の翻訳の原理が「達」「雅」であったこと、かつまた彼の著書が驚異的な成功を収めたこと自体がよくその事実を証明する。）その上彼は西洋の思想・文化に関する知識を所有していただけではなく、その軍事・政治に至るまでの実際的事情に通暁していた。[26]『天演論』がその出発点において、この人と歴史的時点とによって、政治的色彩を賦与されていたことは言うを俟たないことであろう。呉汝綸のその序にも、「天演ハ西国格物家（科学者）ノ言ナリ。ソノ学、天択・物競ノ二義ヲモッテ万彙ノ本原ヲ綜ベ、動植ノ蕃耗ヲ考ウ。治ヲ言ウモノコレヲ取ッテ物変遞嬗（たがいにゆずる）（ノ理）ニヨリ、深ク質力聚散ノ義ヲ研メ、推シテ古今万国ノ盛衰興壊ノ由ヲ極メ、シカシテ大帰（おおよそ）任天ヲモッテ治ヲナス。赫胥黎（ハックスレイ）氏起チテ尽ク故説ヲ変ジ、オモエラク、天独リ任ズベカラズ、人ヲモッテ天ヲ持スルヲ貴ブヲ要スト。人ヲモッテ天ヲ持ス（ルハ、）必ズ天賦ノ能ヲ究極シ、人治ヲシテ日ニ新ニ即カシム（ルコトニシテ、）カクシテ後ソノ国永ク存シ、種族頼ッテモッテ墜チズ。コレヲコレ天ト勝ヲ争フト謂ウ」とあり、われわれはハックスレイにおける「倫理」が、社会を支配する「政治」

によって置き換えられ、全人類とその文化の発展・衰滅の問題が一国家一民族の「盛衰興壊」の問題に変身または限定されているのを感じるのであるが、この呉汝綸の『天演論』解釈あるいは解説に多少の行き過ぎはあるとしても、基調においては厳復とこの書の根本的な姿勢を示しているといってよい。厳復はしばしばその「訳」の中にさえ彼の政治論を挿入した。たとえば「凶狡ノ民ハ廉公ノ吏ヲ得ズ、偸懦ノ衆ハ神武ノ君ヲ興サズ。故ニ邦治ノ隆ヲ欲スレバ必ズ民力民智民徳ノ三者ノ中ニソノ本ヲ求ムルナリ。故ニ又コレニ学校庠序ヲ為ル、学校庠序ノ制善クシテ、シカシテ後ニ智仁勇ノ民興ル。智仁勇ノ民興リテシカシテ以テ羣力羣策ヲナスノ資アリ。シカシテ後ニソノ国スナワチ一タビ富ミテ貧ナルベカラズ、一タビ強クシテ弱カルベカラズ[26]」という類である。また同じく「訳」の中に彼自身の次のような言葉がある。「ソノ約既ニ立チテ、背クモノアラバ則チ一群ヲ合セテ共ニコレヲ誅シ、ソノ約ニ背カズシテ群ヲ利スル者ハ一群ヲ合セテ共ニコレヲ慶ス。誅慶各々ソノ群ヲ以テス。初メヨリ未ダ嘗テ君公アリテコレニ臨ミ、貴勢尊位ヲモッテ法令ヲ制為シ、コレニ強イテ従ハシムルニアラザルナリ。故ニソノ約タルヤ、実ニ自ラ立テテ自ラコレヲ守リ、自ラ諾イテ自ラコレヲ責ム。コレ約ノ公ナル所以ナリ。ソレ刑賞皆ソノ群ヲ以テシ、衆民ノ好悪ニ本キテ予（与）奪ヲナス。故ニ必ズシモ善ヲ尽サズト雖モ、マタソノ私ヲ奮ニスルニ由シナシ。私ヲ奮ニスルハ、必ズ刑賞ノ権一尊ニ統ベラル、ヨリ始マル。尊キ者ノ約ハ約ニ非ズシテ令ナリ。約ハ平等ニ行ワレ、令ハ上下ノ間ニ行ワル（中略）輓近数百年欧羅巴ノ君民ノ争大率コレニ坐ル。幸ニシテ今ヤ民権日々ニ伸ビ、公治日々ニ出ヅ。コレ欧洲政治ノ余洲ノ及ブトコロニアラザル所以ナリ。[27]」これらは無論、原著からの大きな逸脱ではあるが、彼の時代の中国の政治を中心とするあらゆるあり方のもどかしさに対する彼の烈しい憤りに満ちた批判の発露であった。そしてこのやり場のない彼の気持は「案語」の中に一層自由なはけ口を見出したのである。「導言・三」の案語にいう。――「嗟夫物類ノ生ズルヤ乳ル者ハ至ッテ多ケレド存スル者ハ至ッテ寡し。存亡の間、間髪ヲ容レズ。ソノ種愈々下リテソノ存スルコト弥難シ。コレ僅ニ物ノ然ルノミナランヤ。墨・澳二州、ソノ中ノ土人日ニ益々蕭瑟タリ。コレ豈ニコレヲ虔劉・朘削[28]シテ後然ルナランヤ。資生ノ物多キヲ加ウルハ限リアリ。術アル者ハ既ニ多クコレヲ取リテ豊ニ、具無キモノハ自ラ取ルコト少クシテ嗇リ、豊ナル者ハ昌ニ近ヅキ、嗇ル者ハ滅ニ隣ス。コレ洞識知微ノ士ノ保群進化ノ図ニ驚心動魄スル所ニシテ、徒ラニ夷夏軒輊ノ間ニ高睨大談スルモノ、深ク事実ニ無益ナルヲ知ルナリ。」同様の憂国の言葉は「導言・四」の「案語」の中にもある。彼は土地本来の動植物が外来のそれに対して必ずしも「適者」でないことを論じた後、こういっている。「伯林海ノ甘穆斯噶加ハ前ニ土民数十万ナリシモ晩近ハ僅カニ数万ニシテ、存スルモノ什ノ一ニ及バズ。コレ俄人ノ親シク余ノタメニ言イシトコロニシテ、且ツ謂ク過是益々少カラント。物競既ニ興ル。負クル者、日ニ耗ウ。区々人満チタリト

モ烏ゾ恃ムニ足ランヤ、烏ゾ恃ムニ足ランヤ」これは直ちに彼の植民政策論につながるのであるが、「導言・七」の「案語」において彼は英国の植民政策の成功を説き、中国・中国人の実態についてこう言っている。「英倫ノ民、墾荒（植民地開拓）ニオイテ乃チ独リ著ル。前ノ数国（荷蘭・日斯巴尼亜・蒲陀牙等）コレニ方レバ後ニ瞠乎タリ。西ニ米利堅アリ、東ニ身毒アリ、南ニ好望新洲アリ。ソノ幅員、幾欧洲ト埒シ。コレ僅ニ海ニ習イ商ヲ擅ラニスルノミナラズ、狡黠堅毅コレヲ為シナリ。マタソノ民ヨク自ラ制治シ、合群ノ道ノ勝タルヲ知ルノミ。……中国二十余ロノ租界、英人ソノ中ニ処ルモノ多キモ千ヲ逾エズ、少キハ百ニ及バズ。シカモ制度釐然、隠トシテ(一)敵国ノ若シ。吾ガ閩粤ノ民南洋非洲ニ走ルモノ所在億ヲモッテ計ウ。然レドモ人ノタメニ臧獲セラレ、駆斥セラルヽヲ免レズ。悲シキカナ。」そして彼はさらに自然界における生存競争に関連して、国際競争の問題をとりあげ、その競争の意欲の必要（それはハックスレイもその絶滅を肯定したのではないが、）とその国家的・民族的見地に立つ強化について次のような言葉をさえ発している。――「周秦以降、戎狄ト角（競争）スルモノ、西漢ヲ最トナシ、唐ノ盛時コレニ次ギ、南宋最モ下ル。古ヲ論ズルノ士、ソノ時俗政教ノ何如ヲ察シ、モッテソノコレヲ然ラシムル所以ノ故ヲ得ベシ。今日ニ至リテ、若シ僅教化ヲモッテ論ズレバ、欧洲ト中国ノ優劣ハ尚未ダ言ウニ易カラズ。然レドモ彼ノ民ハ然諾ヲ設ケ、信果ヲ貴ビ、少ヲ重ンジ、老ヲ軽ンジ、壮健ヲ喜ビ、屈服スルトコロノ風ナシ。即チ東海ノ倭（日本）モマタ生ヲ軽ンジ、勇ヲ尚ビ、党ニ死シ名ヲ好ミ、震旦（中国）ノ民ト大イニ異ルトコロアリ。嗚呼、隠憂ノ大ナルコト言ウニ勝ユ可ケンヤ」[補註③]――この言葉を読み、そして『天演論』が一八九六年、すなわち中国が日本と戦って敗れた年の翌年に出たものであることを考えて見ると、厳復の襟度の大きさ、知性の高さに敬服せざるを得ないが、同時に彼がいかに中国人を国際的生存競争の苛烈な現実に目ざませようとしていたかがわかる。彼は「導言・十五」の訳の最後に彼自身の言葉を付け加えて、むしろ原文に反対の疑問を投げかける。――「然リトイエドモ、今ヤ天下ハ一家ニ非ザルナリ、五洲ノ民ハ一種ニ非ザルナリ、物競ノ水ノゴトク深ク火ノゴトク烈シキ、時平カナレバ通商庀工ノ中ニ隠レ、世変アラバ戦伐縦横ノ際ニ発ル。コノ中、天択ノ効、眷レテ存スルモノイカン。群道ヨッテモッテ進退スルモノイカン。」この場合、いうまでもなく群道は、人間的協力の道であり、社会倫理なのであるが、彼においては国際的生存競争に対抗する国民的協力に重点がおかれるのである。そして国民的協力を阻むものは因習的専制主義であったから、彼にとって『進化と倫理』の教えるものは、そしてそれによって彼が人に説こうとしたものは、進化論によって導かれた、国際的生存競争場裡に残存し、あるいは勝ち抜くための体制、民主主義体制の確立であった。彼が「尊民叛君、尊今叛古」を唱えたのはこうした論理によったと考えることができる。そしてまた問題を、国際政治・国際生存競争から引き離して考える限り、民主主義体制の

確立はハックスレイの『進化と倫理』の線に正しく沿うたものであったといえる。何故かといえば――ハックスレイはその「進化と倫理」において、「ロマーニズ講演」の規定に従って、宗教とともに政治に触れないことをその論議の建前とした。がそれにもかかわらず、既存の階級社会制度に反感を抱き、「富人にありてこれを装飾する慈善と物惜しみせざる宏量も、無産者にありてはこれを窮民たらしむるに足る。成功せる軍人がよってもってその栄達をかち得たる精力と勇気と、大理財家がよってもってその巨富を致せる狡智は、もしその時と処を失わしめんか、至って容易にそれらの享受者を絞首台あるいは牢獄に導くの因たるべし」[29]というがごとき人を刺す言葉を吐いた彼は次のようにいっているのである。――「愚物・悪党をしてその本来占むべき社会の下底に沈むことなく、これをその上位に留まらしむる人為的措置無かりせば、福利の競争（ハックスレイは文明社会においては、その競争はしばしば「生存」のためであるよりも、福利のためのものであると考えた。）[30]は、社会的複合体の単位たる人間をして下底より上位へ、上位より下底への不断の循環を確保せしむべし。この競争における生存者、すなわち国家の大部分を形成する人々は、最上位に到達する「最適者」にあらずして、中位の「適者」の大団体なるべく、彼等はその数とより優れたる繁殖力によりて、例外的に能力を恵まれたる少数者を常に圧倒することを得ん。[31]」もっとも彼はその理想社会実現の方法が、自然界の生存競争による選択でなく、また園芸家の良種・悪種を取捨する人為的選択であってはならないことを強調し、かつその具体的な問題の埒内に踏み込まなかったことは事実である。だがそれにしてもこれが社会政策の問題に、抽象的ではあるにしても政治に、無関係であるとすることはできない。（彼はその慎重を極めたいわゆる「エグ・ダンス」において、卵を踏み割らないまでも、危うく卵に足を触れたのである。）本来政治的意図の濃厚な『天演論』がここまで来ると、きわめて自然に原著に即いて行くことができるように見えるのも偶然ではない。また原著が『天演論』に籠められた厳復の、意図に、――少くともその重要な一部分に、示唆と激励とを与えたのはこの点であるということができるであろう。

だが結局、『天演論』において、最も重要な問題は「生存競争」の観念に外ならなかった。それが厳復の言葉を用いれば、『天行人治論』とも、あるいは『天人論』とも呼ばれるべき筈であるのに、単に『天演論』と題されたゆえんであるともいい得る。厳復は、進化における自然法則の、人間社会に対する適用に疑義を挾もうとはしなかったのである。彼はその書中にしばしば原著そのものを批判しているが、その論拠はつねにハックスレイに対立したスペンサーの中に求められた。[32]将来の人口問題に関しても、彼はハックスレイのような憂慮の表情を示さず、スペンサーの楽観的な意見に賛意を表しているようである。[33]一つには、ここにも中国という大国の面貌を窺うことができるのかも知れない。

だがこれほど生存競争の意味を肯定した厳復も、その後、中国国

内における「競争」に失望した後、最後に西洋における「競争」が、第一次欧洲大戦としていたずらに惨烈な形相を暴露した時、西洋文明にもいわば生存競争放任説にも決定的な幻滅を感じたようである。そしてその半面、彼は古い中国の文化・倫理への郷愁と尊敬を取り戻した。もともと彼は中国古典文化の浸潤した教養人だった。その上彼が仏教にも相当精しかったことは『天演論』「論・仏法第十」の本文や「案語」を読むだけで十分想像がつくのである。[補註⑯] 彼はすでに『天演論』においてさえ、「今日ニ至リテ、若シ僅教化ヲモッテ論ズレバ、欧洲ト中国ノ優劣ハ尚未ダ言ウニ易カラズ」と上掲の引用文の中にも書いている。そしてついに彼は往年の「尊今叛古」に背を向け、彼を追い越して前進する新しい時代のきびしい非難を浴びながら、これに冷い眼を投げかける孤独な老人となり、そして不遇のうちに死んで行った。がそれを彼の単なる保守主義・尚古趣味への頽落とのみ見ることは必ずしも正当ではない。何故なら、彼は最初から気付いていたが、敢て強調しなかった『進化と倫理』における「倫理」の面を、――彼が『天演論』の自序に「赫胥黎氏ノコノ書ノ恉、斯賓塞ノ天ニ任セテ治ヲナスノ末流ヲ救ウヲモッテ本トス。ソノ中ニ論ズルトコロ吾ガ古人ト甚ダ合ウモノアリ」といった面を、国家的・時代的視点を超えて、人類的な、はるかに遠い展望のうちに静かに見直していたかも知れないからである。

けれどもそれは彼の後年の事に属する。『天演論』の公けにされた翌年、一八九九年（明治三十二年）厳復は、当時なお少壮気鋭のジャーナリストであるとともに、すでに欝然たる中国学者であった湖南・内藤虎次郎（一八六六―一九三四）に会った。それは湖南の最初の中国旅行の時のことであるが、彼は天津で日清人合弁の新聞社「国聞報」を訪ね、主筆の方若（号・葯雨）に会い、彼から『天演論』をもらい、かつその紹介でこの新聞の創立者でもある厳復に会ったのだという。[54] ところがここに驚くべきは、その時湖南がハックスレイを知っていた、いや単に知っていたというよりも、進化と倫理の問題についてハックスレイ的な思想を抱いていたことである。

湖南はつとに師範学校在学時代に進化論に接し、その思想の大体に通じ、[55] 明治十八年、その四年生の時、「唯物的道徳自愛主義」と題する講演を行い、進化論に基ずくエゴイズムを説いたが、後東京に出て西村茂樹や大内青巒らの感化もあり、ふたたび彼が幼年時代以来はぐくまれて来た東洋的倫理思想への復帰の念を深めたといわれる。[56] そして一八九〇年（明治二十三年）岡崎の三河新聞の主筆として在職中彼はその地方の講演会において、「倫理の大体」と題して唯物論的エゴイズムを抑え、人間社会は相愛相助主義に立つべきことを強調した。この結論に達するには、英国の「十九世紀雑誌」所載のハックスレイと露都大学のケスレルとの異論を対照した論文の邦訳をある雑誌で見たのが役立ったという。ただその雑誌が何であったか、従ってその内容がはたしてどのようなものであったか不明なのは遺憾であり、[57] また進化と倫理の問題においてその時点では

湖南はあるいはハックスレイよりもクロポトキンの「相互扶助論」の先駆者ケスレル（Kessler, Karl Fyodorovitch, 1815—81）により多く共鳴するものを見出したと自ら思っていたのかも知れない。だが「進化論のとく生存競争を全く否定するものではないが、なお相愛相助主義を優越させる」[8]ことを主張した湖南の説はハックスレイと一致し、かつ彼を起点としたと言い得るのである。[補註④] なおその『進化と倫理』は日本では一八九五年、『哲学会雑誌』にその大意を訳述したものが掲載されている。原書刊行の翌年であり、『天演論』刊行の前年である。それは『天演論』のような訳出上の苦心の施されたものでなく、また「序論」（Prolegomena）の部分は省かれているが、淡々と原意を捕えている。湖南がそれを読んだかどうかわからない。さらに一八九九年彼が厳復と会った時、進化と倫理の問題について、またハックスレイについて、彼等は語り合わなかったのだろうか。これは非常に興味ある問題だが、湖南は厳復との筆談記録にそれに触れていないから、恐らく不明のまま終るとすればこれまた遺憾という外はない。[補註⑤]

さらに最後に問題として残るのは、『進化と倫理』あるいは進化論に対する中国と日本との受けとめ方の大きな相違——中国であれほどの波瀾を呼んだものが、なぜ、日本では比較的正しく理解されたとしても、（湖南の思想形成上、進化論が大きな役割を演じた《とわたくしは思うのだが》ような例はあるが）一般に無風状態的な平穏裡に通過して行ったかということである。[補註⑥] これは比較思想論、比較文化論に関する大きな問題であろう。だがわたくしにはいまそれを論じる余裕がない。わたくしはわたくしの最後の問題、T・H・ハックスレイの『進化と倫理』とその孫ジュリアン・ハックスレイ（Sir Julian Sorrell Huxley, 1887—1975）の思想との関係について、——特に『進化と倫理』の講演の行われた恰度五十年後、同じオックスフォードの「ロマニーズ講演」で、殆ど同じ演題の「進化的倫理」という講演においてジュリアンが展開した論議について、さらにその弟のオルダス・ハックスレイのその問題をめぐる思想（ジュリアンはそれをも批判したのであるが）等について述べることにしたい。

（この稿を草するに当って、厳復に関する智識は殆どすべて増田渉氏の『中国文学史研究』に仰いだことを記して深甚なる感謝の意を表する。また内藤湖南に関しては三田村泰助氏著『内藤湖南』から啓発を受けた。これまた厚くお礼申し上げたい。なおそれらに関して誤りがあるとすれば責任はすべて筆者の負う所である。なお『天演論』は主として筆者自身の論述の便宜のために原文を書き下しにした。もし不適当なところがあれば幸に大方のご叱正を賜わりたい。）

註

① 増田渉『中国文学史研究』、（岩波書店、昭和四二年）、一九二頁参照。

② *Evolution and Ethics and Other Essays*, xiii.

③ 『中国文学史研究』、一九一頁。

④ 同書、一九二頁。

⑤ 同書、一九二頁。『天演論』の呉汝綸の序の最後に「光緒戊戌孟夏桐城呉汝綸叙」とある。光緒戊戌は正に一八九八年である。因に、わたくしが見ることを得た『天演論』は関西大学図書館所蔵「泊園文庫」中の一本であり、それには「光緒辛丑仲春富文書局石印」の刊記があり、表紙に「甲辰九月沈均敬贈藤沢先生」の文字が墨書されている。辛丑は一九〇一年、わが明治三十四年であり、甲辰は一九〇四年、明治三十七年である。

⑥ 但『天演論』にも「進化」という文字が既に見られる。『天演論』論十七は「進化」と題せられている。

⑦ 『天演論』、導言一（察変）。

⑧ 『天演論』、論一（能実）に「始メ易簡ヲ以テシ、変化ノ機ヲ伏ス。コレニ命ケテ儲能トイフ。後漸ク繁殊、変化ノ致ヲ極ム。コレニ命ケテ効実トイフ。儲能ヤ、効実ヤ、合セテコレヲ天演トイフ」とある。これは *Evolution and Ethics*, p. 48 の potentiality と epiphany に当るが、*E. & E.*, Prolegomena I, p. 8 には potentiality と explication の語が使用されている。但『天演論』では後者に相当する導言二（広義）にそれは訳されいない。ただその「案語」の中で、スペンサーを引いて「万物ハ簡易ニ始マリ、錯綜ニ終ル」といっている。

⑨ 小倉芳彦『古代中国を読む』（岩波書店、一九七四年）、一七五―六頁参照。

⑩ 『中国文学史研究』一八九頁。

⑪ 『天演論』呉序、「今赫胥黎氏ノ道未ダ釈氏ニオイテ何如ナルカヲ知ラズ。然レドモソノ書ヲ太史氏・揚氏ノ列ニ儕ウセントスルハ、吾ソノ難キヲ知ル。即チコレヲ唐宋作者ニ儕ウセント欲スルハ吾亦ソノ難キヲ知ル。厳（復）子一タビコレヲ文ニスルヤ、ソノ書駸々トシテ晩周諸子ト相上下ス。然ラバ則チ文顧ウニ重カラズヤ。」

⑫ 『中国文学史研究』、一八九頁、一九二頁。

⑬ 『天演論』自序、「夫レ古人ソノ端ヲ発スレドモ後人ヨクソノ緒ヲ竟ウルナク、古人ソノ大ヲ擬スレドモ後人ヨクソノ精ヲ議スルナケレバ、則チ猶コレ学バズ術無キガゴトク、末化ノ民ノミ。祖父聖ナリト雖モ何ゾ子孫ノ童昏ヲ救ワンヤ。大抵古書ハ読ミ難キモ、中国尤（最高）タリ。二千年来、士利禄ニ狥イ、闕残ヲ守リ、独闢（創）ノ慮ナシ。コヽヲモッテ今日ニ生ル、モノ乃チ西学ニ転ズ……。」

⑭ 『中国文学史研究』、一七七、一七八頁参照。

⑮ 同書、一九九頁に、賀麟が『天演論』の冒頭の一節を引いて、先秦諸子の書の風味があるといい、「此段は特に荘子に似ている」と注していることが記されている。「斉物論」の「南郭子綦、隠几而坐仰天而嘘嗒焉似喪其耦」の書き出しを彼も連想したのであろう。

⑯ 『天演論』論五。「誰レカコレヲツカサドル」『詩経』、「召南・采蘋」の語。

⑰ 『天演論』論十二。「ソノ身を空乏ニシ、為サントスルトコロヲ払乱ス。」『孟子』「告子下」の語。但原文においては「空乏其身行、払乱其所為」。

⑱ 『天演論』論十六。「スナワチ黎民ア、変ジコレ雍グ。」『書経』堯典の語。

⑲ ここに使用した *Evolution and Ethics and Other Essays*は、拙稿≪T・H・ハックスレイの「進化と倫理」をめぐって―その一≫に記したとおり、D. Appleton & Co., New York, 1897 版の Scholarly Press 複製版である。同書は *Collected Essays by T. H. Huxley* (D. Appleton & Co., 1917), Vol. IX, *Evolution & Ethics* と頁付けがほとんど全く同一である。

⑳ 『中国文学史研究』、「厳復について」。

㉑ 前掲拙稿、三頁。

㉒ *Evolution and Ethics and Other Essays*, pp. 81―82.

㉓ 『中国文学史研究』、一八五頁。

㉔ 津田左右吉『シナ思想と日本』（岩波書店、一九七二年第一七刷による）六頁、一三四頁参照。

㉕ 『中国文学史研究』一九一頁。

㉖ 『天演論』導言八。同上「案語」の中で厳復は、反民主主義体制国家の衰退は国民教育制度の不備、国民の知的水準の低さに基ずくことを説いている。

㉗ 同書、論四。

㉘ 虔劉の出典は『左伝』「成十三」虔劉我辺垂。朘削の出典は『漢書』「董仲舒伝」民日削月朘。用字はなはだ該切であるが、その古雅に過ぎる点は彼の好尚を示すものであろう。

㉙ *Evolution & Ethics*, p. 39. T・H・ハックスレイの文体の一つの重要な特徴を示すために原文を掲げておく。

"The benevolence and open-handed generosity which adorn a rich man, may make a pauper of a poor one; the energy and courage to which the successful soldier awes his rise, the cool and daring subtlety to which the great financier awes his fortune, may very easily under unfavourable conditions, lead their possessors to the gallows, or to the hulks."

これはT・H・ハックスレイの孫オルダス・ハックスレイ(Aldous Huxley, 1894—1963)が「文学者としてのT・H・ハックスレイ」('T. H. Huxley as a Man of Letters,' *Huxley Memorial Lectures, 1925—1932*, Macmillan, 1932, pp. 21—24; 'T. H. Huxley as a Literary Man,' *Olive Tree*, Chatto and Windus, 1936, pp. 71—75) において「中間休止法的文章」(caesura-sentence) と名づけた一種の修辞法による文章であって、T・H・が主として思弁的警句として用いた文体の一例である。そのテクニークは、オルダス・ハックスレイによれば、ヘブライ文学に多く用いられ、アングロ・サクソンの詩も稍これに類する技法によったが、英文学において、これを思弁的さらに冥想的警句として用いた最初の文人はサー・トマス・ブラウン (Sir Thomas Browne, 1605—82) であるという。中国の対偶・対句はこれに類するが、前後の句が完全な形式的均斉を保ち、したがって内容上また運用上、「中間休止法的文章」との間に幾分か相違を来している。厳復は『天演論』において自由に多くの対偶・対句を使用しているが、上掲のハックスレイの原文に対して、この場合特に忠実な訳を試みているから（それはその内容が彼の抵抗を感ぜずに同諷できるものであったことを示している）、比較対照の資料として、それを引用して見ると次の通りである。――「豪家土苴金帛所以揚恵声而中産之家則坐是以凍餒猛毅致果之性所以成大将之威名仰機射利之奸所以致駔商之厚実而用之一不当則刀鋸囹圄従其後矣」（富）豪家、土苴金帛ハソノ恵声ヲ揚グル所以ナレドモ中産ノ家ハコレニ坐リテ凍餒セン。猛毅致果ノ性ハ大将ノ威名ヲ成ス所以、機ヲ仰ギ利ヲ射ルノ奸ハ駔商ノ厚実ヲ致ス所以ナレドモコレヲ用イテ一タビ当ラザレバ則チ刀鋸囹圄ソノ後ニ従ワン。）（導言十六）。

㉚ 「福利の競争」の原語は、拙稿『進化と倫理』をめぐって―その一」七頁に書いた通り the struggle for the means of enjoyment（享楽の手段の獲得競争）である。What is often called the struggle for existence in society (I plead guilty of having used the term too loosely myself), is a contest for the means of enjoyment. (*E. & E.*, p. 40) を厳復は導言十七の冒頭に「今ノ人群ニ競ウモノハ所謂富貴優厚ヲ争ウニ非ズヤ」とたくみに訳しているが、彼の文中には「楽利」「栄利」等の語も用いられている。

㉛ *E. & E.*, pp. 41—2.

㉜ 『天演論』導言一の本文の中にもスペンサーの名を挙げているが、「同・一・案」の中でもその思想を紹介し、「同・五・案」「同・十三・案」「同・十四・案」「同・十七・案」等にこれに言及し、特に「十三」「十四」の案においてスペンサーを揚げ、ハックスレイを抑えている。両者の一致をいっているのは「同・十七・案」だけであろう。

㉝『天演論』「導言十五・案」。
㉞三田村泰助『内藤湖南』（中央公論社、一九七二年）、一八二―三頁。
㉟同書、八九頁。
㊱同書、一〇九頁。
㊲同書、一二九―一三二頁。
㊳同書、一三二頁。

補註

(1) 厳復は、内藤湖南と会った時にも、湖南が「大著天演論、……奉読するに文字雄偉、繙訳に似ず、真に大手筆を見る」と言ったのに対して、「観る者の暁り易きを欲するに因るが故に、原文句次に拘々たらず然るに此れ実に訳者の正法眼蔵に非ず」といったそうである。（内藤湖南全集』第二巻「燕山楚水」三二頁。）彼は「訳例言」にも「実ニ正法ニ非ズ」と書いている。

(2) 『天演論』「論十四・案」。

(3) 近代中国思想は仏教の影響を受けることが多く、清朝の中期以来その傾向は益々強くなり、「清末から現代（中華民国初期）にかけても苟くも支那で哲学的思想を持って居るもので仏教に出入せないものはなくなって来た」と内藤湖南も「新支那論」（『支那論』創元社、昭和十三年、発行三一六―七頁）に書いているが、康有為、譚嗣同、章炳麟らの革命家も仏学に深かったという（島田虔次、『朱子学と陽明学』岩波書店、一九六七年、一八五―六頁）。厳復も、彼自身の独自性をもちつつ、その時代の思想・教養の同一圏内に属していたと見るべきであろうか。

(4) 湖南が明治二十三年（一八九〇年）十一月二十日、二十二日の「三河新聞」に載せたその講演旅行記「参南一夜泊りの記」（『内藤湖南全集』第一巻・五二九頁参照）の中で触れた「十九世紀雑誌」（The Nineteenth Century）所載の論文の邦訳を掲載した雑誌、とは何であつたか、いまに未詳であるが、「十九世紀雑誌」所載の論文、そのものはいったい何だったのか。わたくしは最初、そこにハックスレイの名があり、湖南の所説がハックスレイに余りにも類似しているので「十九世紀雑誌」一八八八年二月号所載のハックスレイの「人間社会における生存競争」（The Struggle for Enistence in Human Scilty）をそれに擬したのであるが、そこに「露都大学のケスレル」が名のあり、「相助主義」という言葉のあることを考えて、これはむしろ一八八八年のハックスレイのその論文に対抗して書かれたクロポトキンの論文ではないかと考えるに至った。それは一八九〇年九月号の「十九世紀雑誌」に掲載されたもので、後、一九〇二年、一冊にまとめて刊行された『相互扶助論』の第一章をなす「動物間の相互扶助」（Mutual Aid among Animals）と題する論文である。そこにはハックスレイとケスレルとが対照的、しかもケスレルが「故セント・ペテルスブルグ大学の学部長ケスレル教授」（the late Dean of the St. Petersburg University, Professor Kessler）として、英国の知識社会に初めて紹介されるがごとく書かれている。また湖南は「進化説の事実たる生存競争が進化説全体の事実とはダルウィン氏も説かざりし」と書いているが、それは、「相互扶助」をも「進化の一要素なる相互扶助」（Mutual Aid, A Factor of Evolution）と書いたクロポトキンが、この論文の冒頭に「進化の一要素なる生存競争」（struggle for existence as a factor of evolution）と書いているのでも明かなように、クロポトキンの進化論あるいはダーウィニズムに対する基本的解釈であつた。またそこにある「相助主義」なる言葉そのものが、ただちにそのクロポトキンから来たものであることを想わせる。ただそれがクロポトキンのその論文の訳（あるいは抄訳か解説程度のもの）であつたとしても、一八九〇年九月発行の英国の雑誌の論文がその十一月中旬までに日本で飜訳され、雑誌に掲載されることが当時として可能だっただろうか。湖南のつけた日付、明治二十三年（一八九〇）十一月を動かないものとすれば、彼の読んだ「十九世

紀雑誌」の論文はわたくしの言う所のものとは異つたものなのか。しかし上述のとおり、ハックスレイに対して、ケスレルの名を挙げた論文あるいは記事がそれ以前に「十九世紀雑誌」に掲載されていないようだし、またそうは思えないのである。なお日本で初めて『相互扶助論』の飜訳を手がけたのは、山川均であるという。≪『クロポトキン』1、アナキズム叢書、五一四頁。「解説『相互扶助論』について」（大沢正道）参照。≫ それは平民科学第四編、堺利彦編　山川均述、『動物界の道徳』という題名の書で、明治四十一年（一九〇八）五月、東京有楽社から発行された。これは『相互扶助論』の最初の二章のきわめて自由な訳述である。（因にその書の第一章は≪ルソーとハックスレイ≫と題されているが、この書においてハックスレイが原書におけるよりも、悪意をもって、歪められていることは否定できない。）とに角この書が『相互扶助論』の飜訳のわが国における嚆矢と一般にされているようであるが、もし湖南の読んだものがクロポトキンの訳であつたとすれば、簡単な抄訳であつたとしても、山川訳に先行すること十八年という貴重な文献としなければならない。また文献学的問題は別として湖南が夙にクロポトキンの思想に触れてそれを自分自身のものに消化したとすれば、それだけでも興味ある思想史上の一事実としなければならないであろう。もっとも湖南においては、クロポトキンにおけるほど生物学上の問題そのものが重要性を持たず、倫理の問題、あるいは生物学説と人間倫理との関係が関心の焦点にあったとすれば、その点で彼はむしろハックスレイにより近かったと言える。

(5) 『内藤湖南全集』第二巻、三三、三四頁参照。なお三田村泰助氏もその著『内藤湖南』において、湖南がハックスレイをすでに知っていたことは、その訳者厳復に会った際に役立っていると思う、と書いている。（同書、一三二頁）

(6) これに対する解答の一部分はすでに八杉龍一、『進化論の歴史』（岩波書店、一九六九年）一七九頁、上掲『相互扶助論』五一九頁の大沢正道氏の言葉のうちにも与えられているが、これはさらに詳細な検討を要する問題であろう。